

農から考える子どもの教育展

～シュタイナー教育展2017～

▶7月25、26日
(東京都)

学校法人シュタイナー学園(神奈川県相模原市)は7月25日と26日の両日、東京大学で「農から考える子どもの教育展 ～シュタイナー教育展2017～」を開いた。

同学園の教育は、オーストリア生まれの思想家、ルドルフ・シュタイナー(1861～1925)の理念に基づく。人間の中に成長し続けようとする意志と叡智が潜んでいることを洞察した彼は、新しい学校づくりを通して、一学生ぶことをやめず、社会に寄与する人間を育成しようとした。20世紀初めにシュタイナー学校がドイツに開校して以来、学校数は増加の一途をたどり、現在では80カ国1100校にまで広がっている。

アクティブラーニング(学修者が能動的に学修に参加する学習法)や教科間の垣根を越えたプロジェクト型授業、持続可能な生き方を育む実習体験、手作りの教科書でテストのない教育特例校として運営されており、今回は「農」を切り口に講演や体験授業、ワークショップ、手仕事体験が行なわれた。

シュタイナー学校は12年一貫教育を実施しており、各学年1クラスのみに定員26人の少人数制を敷く。どの教科でも生徒が年齢相応のテーマに取り組み、それを糧に成長しているようカリキュラムが考えられて

いる。農的教育は特定の学年に限ったものではない。

3年生での米作りの授業に先立ち、1、2年生は雨の日でも田んぼを散歩したり、観察したりする。米作りでは、田起こしや代かき、田植えから収穫まで一連の作業を手がけるとともに、自然の力と人間の知恵とをうまく組み合わせることで稲が生育していく様子をもつて経験していく。できた米は収穫祭のお祝いとしておにぎりにして全校に振る舞う。

生徒は、米作り体験を土台にしてさまざまな事柄を学ぶ。米と関係する漢字を習ったり、わら細工を制作したりするほか、稲作文化と深くかわる日本の神話に触れたり、米をはかる単位を理解したりする。また、4年生になると稲わらで家づくりを臨む。その後も5、6年生での植物学や6～8年生での園芸実習、9年生では外部の農場に出かけて2週間の農業実習といったものが用意されている。

自然は厳しかったり、汚かったりする。最初は米作りに自分から積極的に関与するというより恐る恐るといった生徒が多いが、回を重ねるごとに楽しみに変わっていくのだという。公立学校でも米作りや野菜作りを授業に取り入れているところはあ

る。農業でも収穫体験などはよく見られる。ただ、学習の場としての意味合いや時間のかけ方は大きく異なるといえるだろう。

「米作りで何かの工程を切り取って体験すると、その前はどうかかなと思うものです。本を読んでわかる知識もあるでしょうけど、生きてつながってきません。何度も通えば田んぼはいま、どうなっているんだろうと気になります。我々教師もいかにしたら理科とか数学とか社会という枠にとらわれずに、それらの学びを身につけていけるのかということ絶えず考えています」(現職教員)

同学校に子どもを通わせる親からはこんな声が聞かれた。

「9年生と5年生の男の子がいます。が、実際に手を動かしたりしてやることが本当に楽しいみたいで、いつも生き生きとして帰ってきます。家庭でおやつが足りないとき、『小麦粉と何々があればどうにかホットケーキができる』というように、何かなくてもあるもので作ってみようという発想につながっています」

なお、ヨーロッパのシュタイナー学校では、畑での毎日の作業から、国数社理などすべての教科を学ぶファームスクールというものも最近立ち上げられたと報告された。

(永井佳史)